

## 保育のなかの紙芝居 — 関屋友彦の福音紙芝居活動を通して —

鬢 櫛 久美子  
種 市 淳 子

### 1. はじめに

本研究は、紙芝居がどのように保育界に取り入れられ、保育メディアとして位置づけられてきたかを明らかにすることを目的としている。これまでの調査で、紙芝居史と保育史との接点を追い、草創期から教材・教具としての紙芝居の有効性に注目した倉橋惣三、副島ハマら先駆者の活動を検証してきた。<sup>1) 2)</sup>

今年度は、教育メディアとして見た「福音紙芝居」を取り上げる。戦後に「基督教紙芝居協会」を設立し、福音紙芝居の制作と出版を行った、関屋友彦の活動を通して、保育と紙芝居の関わりを検討することにした。関屋友彦を取り上げた理由として、本学の附属幼稚園に出版作品が30点近く残されていたこと、関屋本人が96歳（調査時）で健在であるとわかり、直接会ってインタビューする機会に恵まれたことがある。

福音紙芝居の歴史については、今井よねの活動の他は、これまでほとんど検証されてこなかった。本稿では、関屋に対して行ったインタビューと、資料、文献等による調査結果をもとに、関屋友彦の紙芝居活動を追い、その紙芝居観を検討する。

### 2. 今井よねと福音紙芝居

現在の形態の紙芝居は、1930（昭和5）年に街頭紙芝居として始まり、瞬間に庶民の娯楽となった。子どもたちを魅了する紙芝居の特性に注目し、紙芝居をメディアとして活用しようという動きが、教育者、宗教家などの間に次々と生まれた。なかでも、キリスト者の今井よね（1897-1968）は、紙芝居の普及に先駆的な役割を果たした。今井が紙芝居を印刷出版したことで、東大セツルメントの松永健哉に教育紙芝居を成立させ、高橋五山に幼児紙芝居を成立させる等、教育的な

活用の契機を作ったことはよく知られているが、東京禁酒会や、仏教界からも紙芝居の活用方法について、今井に問い合わせがあったことの記録もある。<sup>3)</sup>

今井に関する研究は、ほとんどが彼女自身が記した『紙芝居の実際』を資料とするものが多い。それに対し、上地ちづ子の「今井よねと福音紙芝居」<sup>4)</sup>は、それまで不明のままであった、今井の経歴などを丹念に調べ上げた貴重な研究である。

今井よねは、1897年三重県に生まれ1917年東京女子師範学校に入学した。ちょうど同じ年、そこに倉橋惣三が着任している。倉橋は、立ち絵スタイルであったときから紙芝居に注目していた。倉橋との出会いは、後に今井が紙芝居活動をする土壌を作り出したに違いないと思われる。

今井は、学生時代に洗礼を受け、富山県滑川高等女学校で教職についた。この地に講演に来た賀川豊彦の影響を受けキリスト教社会運動をし、保育にも携わった後、アメリカへ留学して神学を専攻した。今井が東京に戻ったのは、街頭紙芝居が流布し始めた1931年の暮れのことである。キリスト教伝道を目的とした紙芝居活動の普及に、彼女がいかに精力的であったかは、自著『紙芝居の実際』<sup>5)</sup>を通して知ることができる。彼女の活動を書き記すと、以下のようになる。

- |          |                                    |
|----------|------------------------------------|
| 1932年    | 街頭紙芝居画家にダビデ伝を画いてもらい、日曜学校で活用        |
| 1933年 1月 | 日本日曜学校協会で紙芝居伝道を決議、キリスト教出版会から紙芝居を発行 |
| 7月       | 神田基督教青年会給品部に「紙芝居刊行会」を設立し、紙芝居を発行    |
| 8月       | 「紙芝居伝道團」を設立し、紙芝居を会員システムで貸し出す       |

1934年4月 『紙芝居の実際』出版

『紙芝居の実際』には、紙芝居の歴史に始まり、当時の紙芝居の実態が実に細かに、具体的な調査に基づき記されている。貸元の調査、売り子の調査などを緻密にし、福音紙芝居にいかに応用し、伝道に役立てるかを目的として、紙芝居の効果的な演じ方、紙芝居の製作、とりわけ絵の描き方について検討している。

出版に関しては、供給と需要のバランスを保つことが難しく、福音と紙芝居ということで営利事業ではないだけに、経済的な面での苦労は耐えないようであった。

今井の活動は、紙芝居を単なる娯楽ではなく、教育的な目的をもつメディアとしての価値を広めた。しかし、戦時中は次第に国策に沿う内容となっていき、戦後は紙芝居活動を再開することはなかった。今井の活動は、関屋衣子を通して関屋友彦へと受け継がれることとなる。

### 3. 関屋友彦と家族の生涯

#### 3.1 関屋友彦の経歴

関屋友彦と家族の生涯については、彼の著書である『私の家族の選んだ道』<sup>6)</sup>に詳しい。

関屋友彦は、1909（明治42）年に、当時の鹿児島県副知事であった関屋貞三郎の次男として、鹿児島県に生まれた。関屋貞三郎は、「大正昭和期の内務官僚・宮中政治家」<sup>7)</sup>として著名な人物でもある。母・衣子は、敬虔なキリスト者であり、「神の前に常に正直と愛で生きる」ことを子どもたちに説いたが、他のことには無頓着で学校の成績表は見たこともなかったという。

生後翌年、友彦は、韓国併合に伴い朝鮮総督府学務局長に転出した貞三郎について韓国京城（現ソウル）にわたり、幼児期6年間を韓国で過ごす。当時、貞三郎は「朝鮮教育令」の制定に関わり、日本政府や軍部が示した同化政策にもとづく統治方針に強く抗議して「教育は時勢と民度に適合せしめること」の但し書きをつけるように要求し、1年かけて政府を説得し、同意を得ている。衣子も、軍部統制下にあって韓国の人々に分け隔てなく接し、毎週、礼拝を共にしていた。

友彦は、1936（昭和11）年、東京帝国大学法学部を卒業し、横浜正金銀行（現三菱東京UFJ銀行）

に入行する。1940（昭和15）年に上海支店へ転勤し、開戦を迎える。キリスト教の信仰心から戦争に疑念をもち、敗戦を予測していたという。戦争が激しくなると華北交通社に移り、鉄道社員として中国北部をまわって日本軍の加害行為の跡を見ている。

韓国での幼児期体験、中国の地での戦争体験、常に人道的な姿勢を貫き、実際に行動する両親を見て育ったことは、後の関屋の紙芝居観に強く影響したものと考えられる。

表1 関屋友彦年譜<sup>8)</sup>

西暦年 (元号)	記 事
1909年 (明治42)	12.16 鹿児島県加治木町に、鹿児島県副知事の父・関屋貞三郎、キリスト者の母・衣子の次男として生まれる。
1910年 (明治43)	貞三郎が韓国併合に伴い、朝鮮総督府学務局長に転出、父母等と韓国京城（現ソウル）に赴く。小学校1年生になるまで過ごす。
1916年 (大正5)	教育のため、母、兄弟と神戸垂水町に移り、甲南小学校1年に入学。翌年、東京目白に居住。池袋に開校の成蹊小学校に転校し、2、3学年を過ごす。
1919年 (大正8)	貞三郎が、静岡県知事に転出の折、静岡県師範学校附属小学校に転校、4、5学年を過ごす。
1921年 (大正10)	貞三郎、宮内省宮内次官就任に伴い、成蹊小学校6学年に復校。
1927年 (昭和2)	東京府立第一中学校（現日比谷高校の前身）卒業。
1929年 (昭和4)	第一高等学校入学。
1932年 (昭和7)	第一高等学校卒業 東京帝国大学（現東京大学）法学部入学
1936年 (昭和11)	東京帝国大学法学部卒業。 横浜正金銀行（現三菱東京UFJ銀行）入行、横浜本店に勤務。
1940年 (昭和15)	上海支店に転任。翌年、中国で開戦を迎える。
1945年 (昭和20)	8.15 終戦。北京に残留。
1946年 (昭和21)	北京より日本に引き揚げる。引揚に際し、日本の再生には「英語と教育」が大切だと思い、これにかなう仕事を探す。
1947年 (昭和22)	米国の雑誌『リーダーズ・ダイジェスト』日本支社に入社、営業部長に就任。

1948年 (昭和23)	同誌は日本の風土に合わず、営業不振で辞任。 衣子を通じて今井よねを知り、福音紙芝居の開発を始める。「基督教紙芝居協会」を設立(設立時の代表者は関屋衣子、後、関屋友彦に)。
1949年 (昭和24)	基督教紙芝居協会による最初の出版作となる、『二人の木工』『良きサマリヤ人』『シロアムの池』を刊行。
1954年 (昭和29)	この頃 出版社名を「基督教児童図書刊行会」とする(代表者:関屋友彦)。
1957年 (昭和32)	東京都港区麻布に書店「聖山堂」を開き、紙芝居の店頭販売を開始。紙芝居のほか、聖句カード、ぬり絵等の教材なども販売していた。
1965年 (昭和40)	この頃 エンサイクロペディア・アメリカナ社、グロリア・インターナショナル日本支社を経て独協大学英語学部非常勤講師となり、以後24年間、独協大学で教鞭をとる。一方で聖山堂経営も兼業していた。
1967年 (昭和42)	この頃 紙芝居の制作・頒布活動を止める。
2007年 (平成19)	現在97歳。

### 3. 2 紙芝居との出会い

1946(昭和21)年、終戦を中国で迎えた関屋は日本に引き揚げる。日本の再生には「英語と教育」が大事だと考え、リーダーズ・ダイジェスト日本支社に就職する。ここで英語とアメリカ式商法を学ぼうとしたが、当時の日本にノンフィクション雑誌はなじまず、営業部長として営業不振の責任をとり辞任している。

失職中に、母・衣子と親交のあった今井よねを知る。インタビューでは、紙芝居との出会いを次のように回想している。

聖書の紙芝居を私が作ろうとしたのは、ちょっと話が長くなっちゃいますけど、(略)  
それで上海から北京、中国に4年ほどいまして、終戦で日本に帰ってきたんです。そのときに、これから日本はどうやって立ち直ったらいいんだろうか、日本はやっぱり、創造主の天地の神様を知らない国民だとね、欧米はそれに立って、それをもとに国があると。日本はそうでないと。神様のもとに新しく生

まれ変わる日本でなければいけないと思って、僕は銀行を辞めちゃいましてね、日本はこれからは教育と英語だ。英語の勉強をもととしていましたからね。

それで、やっぱりその中で、日本の中にどうして神様のみことばを根付かせたらいいかと。牧師さんたちは熱心に教会でやってるけど、子どもにみことばを日常生活の実践の中で生かしていくという、それが一番の、伝道の、福音の基本じゃないかと。ちょうどそのときにね、今井よねさんっていつて戦前から子どもに紙芝居を日本でやっている方にめぐりあいましたね、それは母がよく知ってて、そこから紙芝居を教わったんですよ。(2005年12月12日)

今井よねさんという方から、指導を受けましてね、当時は公園やなんかで紙芝居を、飴玉や何かを売って、それを見て。それで、そういうものを出版するとか何とかってというのは、今の出版物の中でも一番まあ底辺に属するものだったんですよ。ただね、当時の日本があまりに、伝道の力、神様を知らないんで、どんどん戦争に傾斜してしまったの。それを、私の母が熱心なクリスチャンで、ちょっと型が違う、教会破りのような。それでやっぱり子どもの教育からだ。その頃、今井よねさんの紙芝居が東京の庶民の心をつかんでるわけ。だからそこから始めたらどうだって(笑)、まあ母がね、母が勧めたんですよ、それに私も共鳴して、それで何をおいてもまずやろうじゃないかということになったんですよ。(2006年3月14日)

紙芝居の制作を始めるうえで、母・衣子の影響は大きかったようである。関屋は、敗戦を「創造主の天地を知らない国民」が単一国家の狭い枠で正義をふりかざした結果と捉えていた。そして日本が生まれ変わるために、日本の中に「みことば」を根付かせる必要があると考えた。今井の活動に共感した関屋は、日常生活実践に「みことば」を生かす、その教育メディアとして紙芝居に大きな価値を見出したのである。

#### 4. 関屋友彦の紙芝居活動

関屋の紙芝居活動について、1) 出版作品、2) 原画及び編集資料、3) インタビューの記録、4) 『基督教年鑑』の収録データをもとに検証した。

インタビューは、2005年12月12日、2006年3月14日、2006年9月13日、2007年5月18日の、計4回にわたり行われた。

以上のデータをもとに検証した結果、明らかになったことを以下に述べる。

##### 4.1 基督教紙芝居協会の設立

1948(昭和23)年<sup>9)</sup>、関屋39歳のときに、「基督教紙芝居協会」を設立する。戦後のキリスト教出版社に「紙芝居」の名が付くものは他にはない。紙芝居というメディアに込めた関屋の強い信念がうかがえる。

「基督教紙芝居協会」は、今井よねの活動を継承して設立されたものであった。このことは、関屋の作品である『もう一人の博士』<sup>10)</sup>に「当会は今井よねの後を受けて、七年の歴史を持っております」と記されている(図1)。

今井は時々協会に出入りして友彦と衣子を直接指導した。戦後、今井が紙芝居活動をしなかった理由は不明とされ、議論の的になってきた。<sup>4)</sup> 関屋はインタビューの中で“(私共が引き継ぎ)安心されたかもしれませんね”という言葉を残している。

1954(昭和29)年頃、出版社名を「基督教児童図書刊行会」という名に改め、紙芝居のほか、聖句カード、ぬり絵等の教材も販売するようになる。1957(昭和32)年頃には、「聖山堂」という書店を港区麻布に開き店頭販売も始めている。

##### 4.2 紙芝居の制作・出版

1949(昭和24)年、基督教紙芝居協会の最初の刊行作となる『二人の大工』、『良きサマリヤ人』、『シロアムの池』に始まり、次々に作品を発表していく。これまでに、出版の事実を確認できたものは41点、原画のみが残されているものや記録が曖昧なものも含めると50点程になる。

初期の作品で本学所蔵の『勇者ダビデ』(基督教紙芝居協会、1953)を図2に、出版目録を文末の表2に示す。

作品は、8画面から20画面の作品を外袋に収めた形で販売され、外袋には、タイトル、出版社名、定価等のほか、「あなたの若い日にあなたの造り主をおぼえよ—伝道の書十二章一節」という文字が添えられた。

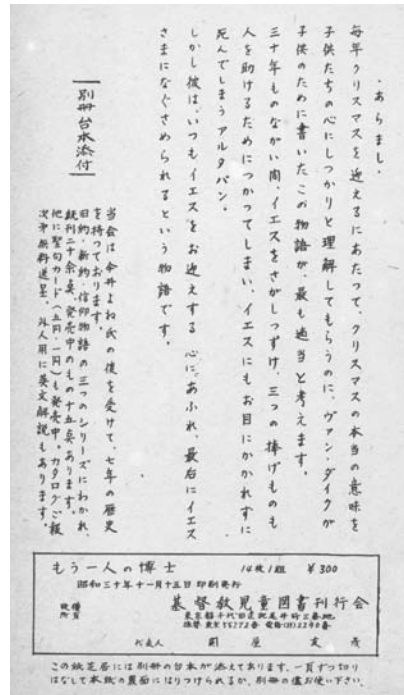


図1 『もう一人の博士』(基督教児童図書刊行会, 1955)  
「当会は今井よね氏の後を受けて、七年の歴史を持っております」とある。



図2 『勇者ダビデ』(基督教紙芝居協会, 1953)

作品の題材は聖書のとえ話を中心として、ほかにトルストイの童話などの文芸作品があった。ほとんどの作品は、裏書きに英文テキストが付き

れているのが特徴で、別刷の英文解説まであった。これらは当時関屋と付き合いのあった進駐軍の将校夫人らの協力を得て作成されたものであった。関屋は、実際に作品を英語で演じてみせて、彼らが納得する英文となっているかどうかを見てもらったという。

#### 4.3 紙芝居の頒布

作品の頒布方法は主に通信販売であった。全国のキリスト教関係の幼稚園や保育園にちらしを送付して注文をとり、一度に1,000部あるいは1,500部といった単位で印刷された作品がよく売れたという。さらにキリスト教のネットワークを活用し、米国や香港など海外に向けた頒布活動を行っていた。また『基督教年鑑』に毎号にわたり広告を掲載するなど(図3)、戦略的なマーケティングを展開していたことが見てとれる。そこには、専攻の法律知識と銀行や外資系出版社でのビジネス経験が生かされていたものと推察される。出版事業として成功していたことも注目に値する。

図3 『基督教年鑑1956』(キリスト新聞社, 1955)に掲載された基督教児童図書刊行会の広告

#### 4.4 紙芝居との別れ

基督教紙芝居協会に始まり、基督教児童図書刊行会を経て、聖山堂という書店を開いて店頭販売も始めたが、この店は1年ほどで閉めることになる。その後、紀尾井町の自宅に「聖山堂」をおき、通信販売を中心とした経営と紙芝居の制作・出版活動を続けていた。

しかし関屋の言葉によれば、「生涯紙芝居屋に

なりきれず”、エンサイクロペディア・アメリカナ社に本職ができた1967(昭和42)年頃に活動を中止している。その理由については、ある程度成功を取っていたとはいえ、紙芝居業だけで生計を立てていくのは難しかったと語っている。紙芝居活動と外資系出版社の職の双方に、使命感をもって取り組んでいたのだが、徐々に安定した出版社の職に傾斜していったという。また、戦争体験を越えて日本に戻った関屋の原点ともいえる「英語と教育」に対するこだわりも残っていたのかもしれない。

まもなくグロリア・インターナショナル日本支社に移り、その後は独協大学英語学部の非常勤講師として24年間の教員生活を送ったのち、現在に至っている。

### 5. 関屋友彦の作品と紙芝居観

#### 5.1 作品から見た特徴

実際の作品に表れた関屋の紙芝居観を見ていくこととしたい。

ここで取り上げる『シロアムの池-盲人とイエスさま』は、1949(昭和24)年に基督教紙芝居協会より出版された後、聖山堂時代に改訂版として刊行されたものである。イエスが「盲人」を癒す奇跡を行ったとされる聖書のたとえ話を題材とし、関屋が特に好んだ作品だという。脚本を関屋が書き、小谷野半二が絵を描いている。冒頭には、編集者のことばとして次のように記されている。

編集者のことば

人は神の形に似せてつくられ、どんな人でも神の姿をやどしています。肉体上や精神上の障害は、かえって神のさかえをあらわす機会として、神は人をつかいたもうのです。この真理を知った人が、古今東西、どんなに大きな働きをしたことでしょうか。悲しみや困難を恩恵として受け入れ雄々しく立ち上がるよう、小さい方のために編しました。

以下は、実際の作品の裏面(「語り」)である。少し長くなるが関屋の作品の特徴が表れていると思われるので、一部画面を添えて引用してみたい。

シロアムの池－盲人とイエスさま－

ヨハネ福音書九章参照

ご注意、ことばは、きき手の子供さんたちの年齢や理解の程度に応じて適当に表現をおかえ下さってけっこうです。

- 1 エルサレムの郊外にシロアムという池がありました。水のきれいな静かな池でしたので、イエスさまは、よくここで祈りをなさったり、人人にお話をなさったりしました。



第1画面

- 2 イエスさまは、今日も、ヨハネやベテロをつれて、町におでかけになりました。  
エルサレムの町はちょうど、かりいほの祭りというお祭りです、たいへんな人手だったので。
- 3 町の人『あれ、あのこじき、あぶない、壁にぶつかる』  
町の人人が、急に、とんきょうな声をあげました。みんなが、おどろいて、指さす方角をみますと、
- 4 一人の盲人のこじきが、群集においたでられて、にげだしてきましたが、壁にぶつかって、どすんとしりもちをつきました。



第4画面

- 5 すると、こんどは、子どもたちがあらわれました。子どもたち『鬼さん、こちら、手の鳴る方に』  
町のいたずらっ子が、まわりにたかって、盲人を鬼にして、にげまわっています。  
盲人『やい、子どもたち、わたしを、いつまで馬鹿にする気か。今度という今度は、ゆるさんぞ』  
盲人はおこって、びゅうびゅう杖をふりまわしました。



第5画面

- 6 盲人『まったくなさない、町はお祭りというのに、わたしは、まっくらだ。これは、だれのせいだ』  
盲人は、しかし、考えました。  
盲人『わたしは、このままでおわってほならない』  
盲人は、必死に光りをもとめました。肉の目には見えませんが、彼の心は、光りをもとめてやまなかったのです。
- (間をおく)
- どこからともなく、香ばしいかおりが、風にのってきました。
- 7 盲人『ああ、いいにおいだ。わたしをなぐさめてくれるのは、おまえだけだ』  
人の心のかわりやすいことを知った盲人は、草花の美しさを愛しました。  
盲人は、花をかかえて、いつまでも動きませんでした。
- 8 この時です。  
盲人は、自分の前に、だれかが立って、見守っているのを感じました。  
彼は、温かい愛の力で包まれるように感じました。



第 8 画面

9 それは、イエスさまと弟子たちの一行でした。弟子のひとりが、イエスさまにきました。  
ヨハネ『先生、この人は、生れつきの盲人ですが、それは、この人のせいですか、親のせいですか』  
イエスさまはだまって盲人をみておられました。

10 イエスさま『いやいや、この人の罪でも、親の罪でもありません。神さまが、この人に立派なはたらきをさせようとなさっているのです』

盲人は、イエスさまのことばをきいて、びっくりしました。

盲人『えっ、わたしでも、神さまのご用ができるとおっしゃるのですか。世間では、わたしを、だれも相手にしてくれないのに』

11 盲人は、神さまは人人を同じように愛して下さる。だから、どんな人でも、神さまのご用をすることができる。悲しんだりうらんだりするのは、まちがっているということがわかってきたのです。

イエスさまはおっしゃいました。

イエスさま『あなたには、立派に、神さまのご用をすることが与えられているのです。さあ、シロアムの池にいて、目を洗っていらっしゃい』

12 盲人は、とぶように、池へと急ぎました。気はせいでも、足が思うようにすすみません。

(間をおく)

シロアムの池は、夕日をあびて、草木をうつし、木の葉が風にゆれて、ひらひらと池におちました。

13 一すくい…

二すくい…

三すくい…



第13画面

14 盲人『あいた… あいた… あいたぞ』

盲人は、思いきり、さげびました。

(間をおく)

盲人は、この二つの目が、あいただけではありません。心の目も開かれたのです。

彼は、このときから、全くあたらしい人になりました。そして、イエスさまの弟子になったのです。



第14画面

15 『わたしは、世の光である。わたしに従ってくる者は、やみのうちを歩くことがなく、命の光りをもつであらう』(ヨハネ福音書八の十二)

イエスさまは、聖書の中で、こういっておられます。

イエスさまは、病人をおなおしになったばかりでなく、人人の心をおなおしになり、神さまの子どもにして下さったのです。

16 夕やみのせまるエルサレムの岡を後にして、イエスさまは、弟子たちをつれて、次の村へと、愛の旅におでかけになりました。 おわり



第16画面

(文中のルビは原文どおりとした)

福音紙芝居は、布教目的が先に立ち面白みに欠ける作品が多いと言われる。今井よねの作品に対しても、聖書の各章各節の内容を忠実にたどろうとしているために、展開が断続的でドラマとしての盛り上がりがないとする評もある<sup>12)</sup>。

『シロアムの池』は、聖書を題材にしているのですが内容は教訓的であるが、ストーリー性の高い作品に仕上がっている。小谷野の絵は生き生きとした表情と動きを感じさせ、文章の簡潔さは物語の展開をリズムカルにしている。また画面の随所に効果的に用いられる「クローズアップ」や「引き」の技法は映画の演出方法にもとづくものであり、今井から引き継いだと思われる。

子どもたちに馬鹿にされた盲人が花の香りを愉しんでいるところにイエスが登場するくだりなど、聖書に出てこない部分は解釈により物語をふくらませ、詩的な表現を用いてドラマを盛り上げている。また苦境にあっても力強く生き抜いて欲しいという強いメッセージも伝わってくる。

冒頭の「ことばは、きき手の子供さんたちの年令や理解の程度に応じて適当に表現をおかえ下さってけっこうです」という注意書きにも、関屋の紙芝居がよく表れている。本学の附属幼稚園に所蔵されていた同作品には、「世間では」を「町のみんなは」に、「香ばしいかおり」を「とてもよい香」など、鉛筆で修正した跡がある。保育の場では、実際に、聞き手の子どもたちに合わせて

「語り」が言い換えられていたことを示している。

関屋は、自らの作品について、“神学者や牧師の硬い人に言わせれば、そんな教え方をしちゃ困るといふかもしれない”と述べているように、聖書の解釈や表現方法に対し柔軟な考え方をもっていた。彼の関心は、聖書の内容を忠実に伝えることよりも、いかに子どもの心に届けるかに向いていたといえる。

関屋の紙芝居活動が、今井よねの継承者としてのものにとどまらず、新たな福音紙芝居の開拓者として、独自の紙芝居観を打ち立てていたことに注目すべきであろう。

## 5. 2 紙芝居観

子ども時代に海外生活を経験し、かつ両親の国を超えた人類愛に満ちた活動を目の当たりにして育った関屋にとって、敗戦後、平和への希求は人一倍強いものであった。平和な世界を築くためには、次世代を担う子どもたちにこの世の創造主の「みことば」を伝え、それを実践できるようにすることが大切だと考えた。神の「みことば」を頭で理解するのではなく、受肉化し体現することの必要性を説く関屋の宗教観は、教条主義に陥った神学にはむしろ批判的で、キリスト教という一宗教に収まるものではない。宗教、宗派を超えた世界観、宇宙観に裏打ちされたものといってよいであろう。

作品のストーリーを構想する際は、文章を短くし、絵と語り部の言葉で伝えるように考えた。

いろいろやっていますとね、やっぱりね、絵なんですね。絵が非常に大切ね。それから物語が短くてね、相手の心を捉える、子どもの心を捉える、子ども用語の。大人の説教じゃあだめなんですよ。

文章はできるだけ短くして、それで絵と語り部のことばでね。それを主眼にしたいと思うんですね。説明が長くなると教育的になって、教えちゃうでしょ。だから絵ではっと子どもの心をつかむ。(2006年3月14日)

絵に強いこだわりをもっていた関屋は、芸術性の高い精神にうったえる力のある画家を選んだ。



多くの作品の絵を小谷野半ニ (1907-1992) に依頼している。小谷野は、代表作に『櫛』(日本教育紙芝居協会, 1943) 等がある当時の人気作家であった。キリスト者ではなかったが、関屋親子の活動に共感し安い画料で仕事を引き受けてくれたという。関屋は小谷野と何度も会って資料を提示し、納得のいくまで描き直してもらった。これを裏付けるように、原画には、関屋のコメントと何度も描き直された跡が多数残されている。

関屋が紙芝居作成の際、絵に重心を置いていた様子をうかがい知ることができる。彼は、イメージの世界を大切にしたのである。「言葉は教えてしまう」といい、教訓的になり過ぎないために、言葉だけに頼らない、視覚メディアとしての紙芝居を評価しているのである。だからこそ、彼の信念を伝え、共感しえる者を絵師とするか、その人の描いた絵に彼と通じる心を見た者を制作者に選んだのである。

また「紙芝居は対話のできるメディア」だとも言っている。一方的に教え込んでも真の理解は得られず、教えは体現できないという考え方がここにも顕れている。

## 6. おわりに

本稿では、福音紙芝居と保育の関わりを関屋友彦の紙芝居活動に焦点を当てて検討した。関屋に対して行ったインタビュー、彼の作品、著書、資料などから、今井よねの活動以外にほとんど検証されてこなかったため、明らかとされていなかった戦後の福音紙芝居の歴史の一部が解明された。

1. 今井よねの活動を戦後継承した者として関屋友彦の活動を発掘した。

上地の研究によれば、今井は戦後は紙芝居活動をしなかったといわれている。しかし、今井は関屋母子に紙芝居について指導するという間接的な活動をし、戦後の福音紙芝居活動を後継者に引き継いだのである。

2. 関屋の紙芝居活動は、平和な社会の構成員としての子どもの教育、すなわち神の「みことば」を日常生活の中で実践できる人を育てることを目的としていた。今井は、昭和初期の社会における経済的に恵まれない子どもたちに目を向け、キリスト教の伝道活動を軸に紙芝居を活用

した。一方、戦争のない平和な社会を目指す関屋にとって、キリスト教は目的のための方法であり、関屋はキリスト教伝道に固執しなかった。

3. 紙芝居を保育所、幼稚園に向けて販売した関屋の活動は、学校教育から紙芝居が締め出された後にも、保育の場で紙芝居が活用されつづけることの一翼を担ったと推察される。

今井の紙芝居が小学生をも対象にしていたのに対し、関屋は幼児を対象にしていた。この点は、紙芝居と保育の関わりをテーマとする本研究において、重要な検討となったといえる。

4. 関屋は、子どもの心をはぐくむ紙芝居の絵にこだわり、紙芝居を視覚メディアとして、また対話のできるメディアとして捉え、教条主義、徳目主義に陥らない教育に有効な教具と考えた。

紙芝居を教育メディアとして検討していく際、この視点は今日の情報機器が高度に発達した社会にあって、紙芝居を見直すことの有効性を示唆していると考えられる。また、言語に偏重した学校知を反省的に捉えなおす視座を提供しているといっよう。

以上、4点が本稿の考察から明らかになった。

## 【注】

- 1) 鬢櫛久美子, 種市淳子「保育におけるメディアとしての紙芝居: 紙芝居通史を中心に」『名古屋柳城短期大学研究紀要』No. 27 2005 pp. 53-67
- 2) 鬢櫛久美子, 種市淳子「保育のなかの紙芝居: 倉橋惣三と「紙芝居」の関わりを中心に」『名古屋柳城短期大学研究紀要』No. 28 2006 pp. 95-105
- 3) 今井よね編『紙芝居の実際』基督教出版社 1934 pp. 127-129
- 4) 上地ちづ子「今井よねと福音紙芝居」『児童文学研究』No. 20 1988 pp. 87-117
- 5) 同上書
- 6) 関屋友彦著『私の家族の選んだ道』紀尾井出版 2002
- 7) 三省堂『コンサイス日本人名事典』1993
- 8) この年譜は、出版作品、インタビュー、関屋

- 友彦著『私の家族の選んだ道』（紀尾井出版、2002）、『基督教年鑑』（キリスト新聞社、1948）にもとづいて作成した。細かな時代においてインタビューと印刷媒体で得られた情報に差異が生じた場合は、関屋氏の了解を得て、印刷媒体の記録によった。
- 9) 細かな時代においては、関屋氏によれば記憶に曖昧な点があるとされた。そこでインタビューと『基督教年鑑』等の印刷媒体による情報に差異が生じた場合は、関屋氏の了解を得て印刷媒体の記録によることとした。
- 10) ヴァン・ダイク原作 小谷野半二絵画 関屋友彦脚色 『もう一人の博士』 基督教児童図書刊行会 1955
- 11) 上地 前掲書 p. 104
- 12) 同上 p. 95

表 2 関屋友彦出版目録 (現在までに確認されたもの)

一	タイトル	英文タイトル	著者	発行者	出版年月日	定価	書誌典拠
1	二人の大工			基督教紙芝居協会			『基督教年鑑』1950
2	よきサマリヤ人			基督教紙芝居協会			『基督教年鑑』1950
3	シロアムの池	The Pool of Siloam	関屋友彦 企画並編集	基督教紙芝居協会	1949.3.1	16枚200円	関屋氏所蔵原典
4	靴屋のマルチン：トルストイのお話より	Shoemaker Martin	関屋友彦 文 松村三冬 画	基督教紙芝居協会	1949.12.1	20枚230円	柳城所蔵原典
5	イエス・キリスト 上巻			基督教紙芝居協会			『基督教年鑑』1952
6	イエス・キリスト 下巻	Jesus Christ Part II	関屋友彦 編 平澤定人 画	基督教紙芝居協会	1949.12.12	16枚200円	関屋氏所蔵原典
7	勇者ダビデ	David the Dauntless	基督教紙芝居協会 編	基督教紙芝居協会	1953.7.1	16枚330円	柳城所蔵原典
8	放蕩息子	The Prodigal Son		基督教紙芝居協会	1953.11.30	12枚250円	柳城所蔵原典
9	タイタニックは沈まない：死に打ち勝った愛の物語	The Lesson of "The Titanic Still Lives"	基督教児童図書刊行会 編	基督教児童図書刊行会	1954.3.25	12枚250円	関屋氏所蔵原典
10	二人の大工 [新版]	Two Carpenters	基督教児童図書刊行会 編	基督教児童図書刊行会	1954.7.1	印字欠損	柳城所蔵原典
11	よきサマリヤ人 [新版]	The Good Samaritan	基督教児童図書刊行会 編集	基督教児童図書刊行会	1954.7.7	16枚330円	関屋氏所蔵原典
12	モーセの一生	The Life of Moses	小谷野半二 画 基督教児童図書刊行会 編	基督教児童図書刊行会	1954.7.7	16枚330円	柳城所蔵原典
13	ヨセフ物語	The Story of Joseph	小谷野半二画	基督教児童図書刊行会	1954.11.1	16枚330円	柳城所蔵原典
14	聖ペテロ	Saint Peter	野辺地天馬 文 平沢美礼 画	基督教児童図書刊行会	1955.4.1	12枚250円	柳城所蔵原典
15	ノアの箱船	The Ark of Noah	野辺地天馬 文 松村三冬 画	基督教児童図書刊行会	1955.8.1	12枚250円	柳城所蔵原典
16	からすのかんちゃん		野辺地天馬 作 こずえ 画	基督教児童図書刊行会	1955.10.15	11枚200円	関屋氏所蔵原典
17	もう一人の博士		ヴァン・ダイク 原作 小谷野半二 絵画 関谷友彦 脚色	基督教児童図書刊行会	1955.11.15	14枚300円	柳城所蔵原典
18	少年イエスさま	Boy Jesus	キリスト教児童図書刊行会編集部 編 小谷野半二 画	基督教児童図書刊行会	1956.5.15	14枚300円	柳城所蔵原典
19	信仰の父アブラハム	Abraham-Father of Faith	林俊夫 画 基督教児童図書刊行会 編集	基督教児童図書刊行会	1956.9.1	10枚200円	柳城所蔵原典
20	ちびのザカウ	The Little Zacchaeus	石谷友人 文	基督教児童図書刊行会	1956.12.1	12枚250円	柳城所蔵原典
21	ほうとうむすこ [新版]	The Prodigal Son	小谷野半二 画 基督教児童図書刊行会 編	基督教児童図書刊行会	[不明]	12枚250円	柳城所蔵原典
22	アルタバン物語：もう一人の博士	The Story of the Other Wise Man	ヴァン・ダイク 原作 小谷野半二 絵画 関谷友彦 脚色	基督教児童図書刊行会	[不明]	14枚300円	柳城所蔵原典
23	みどり子イエスさま			基督教児童図書刊行会			『基督教年鑑』1958
24	復活のイエスさま			基督教児童図書刊行会			『基督教年鑑』1958
25	シロアムの池 [新版]：盲人とイエスさま	The Pool of Siloam	小谷野半二 画 聖山堂編集部 編	聖山堂	[不明]	16枚350円	柳城所蔵原典
26	エステル皇后	Queen Esther	林俊夫 画	聖山堂	[不明]	12枚260円	柳城所蔵原典
27	クリスマスの森	The Christmas Forest	ルイス・ファティオ 原作 樋田豊治 脚色 T・M 絵画	聖山堂	[不明]	16枚350円	柳城所蔵原典
28	さいごの週のイエスさま：イエスキリストの一生 下巻	The Last Days of Jesus		聖山堂	[不明]	16枚350円	柳城所蔵原典
29	ダニエル物語	The Story of Daniel	関根文之助 編 林俊夫 画	聖山堂	[不明]	12枚260円	柳城所蔵原典
30	十戒 後篇：続モーセの一生	The Ten Commandments Part Two	小谷野半二 画 聖山堂編集部 編	聖山堂	[不明]	12枚280円	柳城所蔵原典
31	おさなごサムエル	The Infant Samuel	小谷野半二 画 聖山堂 編集	聖山堂	[不明]	8枚200円	柳城所蔵原典
32	クリスマス・ストーリー	The Christmas Story	林俊夫 画	聖山堂	[不明]	12枚300円	関屋氏所蔵原典
33	ノアとこう水	Noah and the Ark	野辺地天馬 文 林俊夫 画	聖山堂	[不明]	10枚230円	柳城所蔵原典
34	十戒 前篇			聖山堂			『基督教年鑑』1960
35	母の愛			聖山堂			『基督教年鑑』1960
36	少年ヨセフ			聖山堂			『基督教年鑑』1962
37	小豚物語			聖山堂			『基督教年鑑』1962
38	ロバの子			聖山堂			『基督教年鑑』1962
39	ダビデとゴリアテ			聖山堂			『基督教年鑑』1964
40	トラントの話			聖山堂			『基督教年鑑』1964
41	馬小屋のイエスさま						『さいごの週のイエスさま』裏書き

注) このリストは、実際に出版された作品と、『基督教年鑑』(キリスト新聞社, 1948.) の収録データにもとづいて作成された。個々の書誌情報の典拠は表中に示した。

## **Tomohiko Sekiya and Christian Kamishibai**

Bingushi, Kumiko\*

Taneichi, Junko\*

本稿では、関屋友彦の戦後の紙芝居活動に焦点を当て、関屋に対して行ったインタビュー、資料、文献等の記録をもとに、福音紙芝居と保育の関わりを検討した。その結果、これまでほとんど明らかにされてこなかった戦後の福音紙芝居の歴史の一部が解明された。また関屋の紙芝居活動と紙芝居観について、1) 福音紙芝居の先駆者とされる今井よねの活動を戦後引き継いだ者として関屋友彦の活動を発掘した。2) 関屋の紙芝居活動は戦争のない平和な社会の構成員としての子どもの教育をめざすものであり、キリスト教は目的のための方法と捉え伝道には固執しなかった。3) 紙芝居を保育所、幼稚園に向けて販売した活動は、学校教育から紙芝居が締め出された後にも、保育の場で活用されつづけることの一翼を担った。4) 子どもの心をはぐくむ紙芝居の絵にこだわり、紙芝居を視覚メディア、また対話のできるメディアとして捉え、教条主義、徳目主義に陥らない教育に有効な教具と考えた。以上4点を、本稿の考察を通して明らかにした。

キーワード：福音紙芝居 (*printed paper plays of christian stories*), 関屋友彦 (*Sekiya, Tomohiko*), 保育教材・教具 (*materials and tools for instruction of early childhood care and education*), 児童文化 (*child's culture*)